82歳で博士に
～毎日が巡礼～

世界地図を見るのが好きだ。学生時代には三畳の下宿に大きな世界地図を張っていた。

当時の夢は車で世界各地をまわること。そのために同志三人と共同生活までしたが実現しなかった。

私は日本大学芸術学部放送学科の第一期生。実は伯父が裁判官をしていたので、なんとなく中央大学の法科を受験したが不合格。浪人でもしようかと考えていた時、担任の先生から「君が文化祭で司会をしたのを見た。君はアナウンサーに向いている。浪人しても成績が伸びるタイプではないのでこの大学を受験した方が良い」と言われて一冊の週刊誌を渡された。

そこには日大芸術学部に放送学科が来年四月から開設されるとあった。昭和三十二年のことで、民間放送のテレビ局が各地に開局されたころのことだ。

結局、その受験がその後の人生を決めることになり、昭和三十七年にアナウンサーとして地元山口放送に入社、以後四十三年間、お世話になった。

さて、放送学科での授業には「脚本論」があり、放送劇作家の西澤實さんが先生だったが、授業は落語を聞くよりも面白かった。

当時はラジオが一家だんらんの中心。ラジオの特性を生かした「架空実況放送」をはじめ「三太物語」、学校放送「マイクの旅」「ピー子ポン太郎世界めぐり」などNHKの数々の脚本を手掛けられた。私と同世代の人なら「西澤實」という名前はご存知だと思う。

先生から提出を求められた小論文に「地図の部屋」という作品を書いたが、これを先生は大変褒めた。部屋の世界地図から世界を旅する夢を書いたように思うが、以後可愛がってもらった。

大学を卒業して十年余り、確か四十九年だったと思うが、突然、山口放送に来られた。

東洋鋼鈑㈱の社歌を依頼されて下松に来たとのこと、西澤實作詞、藤山一郎作曲の社歌は今も式典などで歌われているそうだが、残念ながら私はまだ聞いたことがない。

山口放送でも講演を依頼し、その時は我が家にも立ち寄られた。卒業後も師弟関係が続くのは有り難いことだ。先生は本を出版されると送って下さった。平成十二年に届いたのは『創始期ラジオドラマとラジオドラマの「ことば」研究』博士論文を本にしたものだ。

西澤先生は八十二歳で芸術博士号を取得された。三百三十ページに及ぶ大作、八十二歳の高齢で書きあげたとは驚くばかりである。

今も書斎に張っている大きな世界地図を見ながら恩師に思いをはせる。五十年前に褒められた「地図の部屋」。多分、何歳であろうが志を持ち、それに向かって生きる、大切なのは結果よりそれを続ける過程。八十二歳での博士号取得は講義ではなく、身をもって実践して見せて下さったように思える。

自分自身も七十歳を越え、ややもすれば自分中心にばかりものを考える。今も地図は限りなく夢を与えてくれる。そして自分自身よりも他者によって生かされている自分に気づく。訪れた国はまだわずか、全く知らない所でも自分と同じように人々が生活しているのだ。

昭和49年、山口放送を訪れた恩師、西澤先生＝左は筆者

送られて来た恩師の本